

「思い」を「ことば」で「詩」にする意義

洲 浜 昌 三

風薫る五月中旬、家の前に車が止まり、近づくと窓が開き後ろの席に山内さんの姿がありました。

「今日退院しました。左手は不自由になりましたが、お陰様で右手は使えます。入院中に初めて詩を書きました。詩とはいえないものもあるかもしれませんが読んでみてください」

入院中の短期間に40篇！驚きました。きつと表現意欲を突き動かす強力な動機があつたからでしょう。

一気に死の谷へ突き落とされたかもしれない恐怖。現実の世界へ再び蘇えることができた喜び――そこに熱いマグマが形成されたにちがいません。

強い感動があつても、ほとんどの人は、それを言葉で表現し、記録に残すことはなく、すべて時と共に忘却の彼方へ消えていきます。

記録として文字で残すとすれば、いろいろな形式があります。

俳句や短歌、川柳の場合は言葉に制限があります。死をまぬがれた喜びを「五・七・五」などの限られた語数で表現するためには技巧も必要で、至難の業です。十分の一も「思い」を表現できないかもしれません。

小説に書くとすれば時間が必要です。日記は私的過ぎて公表に不向きです。

詩は、伝統的な文学形式でありながら、表現は自由です。「いま心の中に溜まっている思い、その言葉が詩です」という詩人もいます。

茨木のり子さんは、「詩」という漢字の語源にイメージを馳せ、「離陸の瞬間を持っていないものは詩に非ず」

「地を蹴り宙を飛行するのが詩」と書いています。

黒丸だけの「冬眠 ●」という草野心平の詩もあり、小説のような長い散文詩も、一行だけの詩もあります。

入院中の思いを記録として、更に愛するお孫さんとの共同制作として、山内さんが詩を選ばれたのは賢明だったと思います。

表現は自由でも、難しいのは、読む人が、どのように受けとめてくれるかです。自分では「良い」と思っても、「つまらない」と思う人や、「何も感じない」人がいるかもしれません。逆に「共感」してくれる人も必ずいます。数人でもそのような人に出会うことは創作の最大の喜びです。

この詩集には、様々な系統の詩があります。自分の人生を振り返った詩には、成し遂げた仕事への誇りと同時に、独特の謙遜や自嘲的な視点があり、作者の心情が伺えます。

山内さんが大好きな「言葉の分析、解釈」「言葉遊び」には、象形文字である漢字の原型の姿をとらえ、周囲の現象を解釈しようとする知的・心情的探求心が伝わってきます。ユーモアのある詩も数編あり、笑いを誘います。

「半月と準備中」「元気ですか」などは、入院中ながら周囲に対して活発に反応する作者の精神と、そこにいる人たちとの反応が、生き生きと描出されています。

一命をとりとめた自分を見つめて生まれた一連の詩には、作者の気持ちや考えが素直に表現されていて、読者の心にしみじみと伝わってきます。真実の思いを、飾りのない言葉で素直に表現することは人の心を打ちます。表現は稚拙であっても、「思い」がダイレクトに読む人

の心に届くのです。そこには詩が立ち上がってきます。

「一瞬にして赤ん坊に」「奇跡を信じ 耐えた」「奇跡の
第一歩」「明日には明日の風が吹く」などはその例だと
いえます。

一人の人間の一生や喜びも悲しみも、二十年、五十年
たてば、みな忘れられてしまいます。その時の「思い」
を詩の形式で言葉にされたこの詩集は、何十年たつても、
誰かの手でめくられ、人の心に伝わるでしょう。

詩とは何か。難しい命題ですが、ぼくは「記録」も詩
の重要な要素だと信じています。

（ 島根県詩人連合理事長 中四国詩人会顧問

本詩人クラブ会員、詩集『春の残像』など）